

私家集と勅撰和歌集

— 拾遺集における貫之歌風の継承 —

中 周 子

従来、和歌史は勅撰和歌集を中心に構築されてきた。勅撰和歌集には、古今集から新統古今集に至る二十一代集があるが、その範囲を越えて、私家集は脈々と多種多様の形態と内容を持ちながら存続してきた。漸く、十年前に、中古・中世の私家集に関しては、現存する本文がほぼ集大成された。今後、個々の私家集を和歌史上のどこに位置づけ、如何に組み込むかが課題である。

そのような観点に立って、第一の勅撰和歌集である古今集から、第三の拾遺集に至る、およそ百年の和歌の流れに、平安時代前期半世紀にわたって主導者であった紀貫之の私家集が如何にかかわっているかを、本年度の研究テーマにとりあげた。

拾遺集は古今集と同一の性格・歌風であるという見方が和歌史的通説である。確かに、両集を比較すると、配列編纂、撰歌対象、歌人、和歌表現等に多く共通点を指摘できる。しかし、詳細に両集を——特に和歌表現において、比較検討した結果、拾遺集の古今集歌風から変化展開しようとする側面を見出せた。

まず、注目すべきは、古今集には殆ど採取されなかった屏風歌の大量採歌である。屏風絵と伴に享受される和歌の出現は、歌合や贈答歌といった従来の和歌の有様を変貌させた。その最たるものは、画材が歌材となり和歌の世界に浸透してきたこと、また、画中の自然と人物を客観視して詠ずるという詠作者の視点の確立

により、自然と人事の融合した素直な抒情を中心とする詠風が生まれたことである。

そして、屏風歌々人の第一人者として活躍したのが、古今集撰集以後の貫之であった。貫之が非常に多くの屏風歌を製作したことは、貫之集中の歌々と、そして、勅撰集として見ると拾遺集中初見の多様な歌材（屏風絵を媒介として歌材となったもの）が、殆どすべて貫之集に見出せることが物語っている。

さらに、拾遺集初出歌人達の古今集歌風から変化展開しようとした、表現・歌風の形成には、貫之詠歌が重要な動因となっている。

紙幅の制限上、詳述はできないが具体例を二、三掲げて説明を加えておきたい。

例えば、勅撰集では拾遺集に初出の「仏名」を詠んだ次の二首

屏風のゑに仏名の所
よしのぶ
257をぎあかす霜とよもにやけさはみな冬の夜ふかぎつみもけぬらん。

延喜御時の屏風に
つらゆき
258年の内にもれるつみはかきくらしふる白雪とよもにぎえならん。

これらを見ると、貫之が既に「仏名」を詠んでいることがわかる。さらに、この二首は題材が共通であるだけでなく、傍に○印を施した如く、発想も同じである。貫之以前の屏風歌に同様の発想は見当たらない。よって、後代歌人能宣が貫之詠を規範としていたと考えられる。

また、古今集歌の拾遺集歌に対する影響は、主に前代歌人詠に濃く、初出歌人詠にはあまり顕著でないといえる。

例えば、古今集恋部で待つことを久しいと詠ずる場合、待つ—松—長寿のイメージ—久しい、という掛詞によるイメージの連鎖を用いて詠むことが常套であった。

778 ひさしくも成りにけるかな任の江の松はくるしきものにぞありける
(古今集・読人不知)

そして、この表現パターンは拾遺集の次の歌に受けつがれている。

742 なにせむに結そめけむ岩代の松は久しきものとしるく
(読人不知)

しかし、次の初出歌人能宣の詠では、この表現の型を意識していない。

714 逢事を待ちし月日の程よりもけふの暮こそ久しかりけり

そして、この能宣詠の発想の先蹤を求めると次の貫之詠に行きつくのである。

一年を待つることも有ものをけふの暮るるぞ久しかりける

貫之詠は、古今集歌の表現類型から変化しようとする拾遺初出歌人詠の契機となつていたのである。

さらに、古今集歌と同じ詞句を用いつつも詠風の変化した歌が拾遺集に見出せる。特に初出歌人に変化の傾向は顕著である。

787 秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらにならむ
(古今集・友則)

909 時のまも心はそらになる物をいかですぐし昔なるらむ
(拾遺集・実方)

古今集787番の「心が空になる」という表現をふまえた歌は、拾遺集に五例と多く見当たると、最も時代の新しい歌人実方の詠のみを掲げた。この二首を比べると、同じ詞句を用いながらも詠風の異なることが明らかである。即ち、友則詠は「人の心の

空になる」という表現の面白さ、その原因を説明することに主眼

がおかれている。一方、実方詠は「心が空になる」という表現を、何の説明もなく「思う」「恋しい」と同等の心情を表現する語として一首に詠み込んでいる。このような拾遺集初出歌人に顕著な詠風は、次の如き素直な抒情が中心となつていたのである。

69 山吹の花のさかりにゐでにきてこの里人になりぬべきかな
(惠慶)

350 思いでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれ也けり
(よしとぎ)

792 今夜君いかなるさとの月を見て宮こにたれを思いづらむ
(中宮内侍馬)

そして、これらの抒情は、貫之晩年の歌風に近いのである。

このさといかなる人かいへゐして山郭公たえずきくらむ
わすらるゝ時しなれば春の田を返々ぞ人はこひしき

以上見てきたように、拾遺集歌風は貫之歌風の継承なくしては形成され得なかつたのである。

このような表現上の継承の背景には、拾遺集初出歌人達の私家集によって明らかのように、貫之集が熱心に享受されていたという事実がある。

故貫之がよみあつめたる歌を一巻かりてかへすとて……

(惠慶集)

他にも同様の記事が、元輔集、安法法師集等にも見出せるのである。

このように、今後、和歌史は私家集をも組み入れて再構築されなければならない。